



1 大変なことであっても 取り組まなければならないこと

(子ども一人ひとりを生かすとか、一人ひとりを大切にとか、口で言うことは容易なのですが...)

世界的に有名な心理学者が、あるアメリカの小学校で行った興味深い実験の結果があります。

「このテストは、どの子が将来伸びるかを試すテストです。全員にやらせて下さい」という依頼がありました。有名な心理学者の依頼とあって、その小学校では早速実施しました。

実施後、心理学者は答案を見ることなく、何人かの子ども達を無造作に選び、「この子ども達は、将来間違いなくのびるでしょう」と選んだ子どものリストを担当に渡したのです。

渡された先生達は驚きました。その中には、成績も素行も悪くてどうしようもない子ども達が混じっていたのです。「あの子がほんとうに伸びるのかなあ」「あの有名な学者が言うことだから」

「そういえば、おもしろい発想も時々していたな」などと、担任の先生達がリストに載っていた子ども達に接する態度が変わってきました。とてもあいつはだめだという子にも、真剣に接するようになったのです。

その真剣さは感性が豊かな子ども達にはすぐに伝わりました。そして、徐々に子ども達の側も、真剣に学ぶようになったのです。

そして、8ヶ月後学力テストが行われました。結果は、なんと選び出された子ども達の平均点は、他の子ども達よりも12点も高かったのです。かなり学力があがりました。心理学者の一言が、子どもの成績を大幅にアップさせたわけです。

「この子はだめな子」という否定的な見方・接し方をするか、「この子は今にきっと伸びる子だ、何かいいものを持っているはずだ」という肯定的な見方・接し方をするかによって教育の成果には大きな差が生じてしまうという一例です。

どちらかの考えに立つかによって、教育の方法は全く違ってしまいます。

どの子もその子のよさを十分に出し切って、生き生きと学習に取り組めるような指導の手立てをどうするか、こここのところの創意工夫が親や教師一人ひとりに問われているのではないかと思います。

2 MCL(メディア・コントロール・ライフ)推進運動

児童会が中心となって、西二小では積極的・継続的にこの運動に取り組んでいます。毎回アンケートを取っていますが、なかには「大変だからやめよう」「最初だけで長続きしないし、効果があがらない」などのご意見をいただきます。それも一つの大切な考え方です。

MCL推進運動は目的ではなく、規則正しい生活を送ること(基本的生活習慣や学習習慣を築く、早寝・早起き・朝ごはんの定着など)や家族、地域の人々とのふれあいや交流を持って、心豊かな生活を送るための手段であります。そして、学校として取り組んでいるのは、子どもが自分自身で1日の流れを見通し、安定した生活リズムの中で毎日継続して学習に取り組むことにより、学力を向上させることもねらっています。

各家庭の実情や子どもの実態にあわせ、家での約束を家族で話し合いながら無理なく取り組んでいただければと思います。